

# アスペルガー症候群の 共感性欠如に関する試論

— 認知的障害への理解と支援の視点から —

原 英樹

## 1. はじめに

アスペルガー症候群は、著しい知的な遅れを伴わない自閉症圏内の発達障害である (Attwood, 1998)。この障害を抱える児童生徒の中には、通常の学校に通い、障害のない他の児童生徒とともに、学習や課外の諸活動に取り組んで生活する者も少なくない (杉山, 2002)。

しかし、アスペルガー症候群の児童生徒については、共感性が欠如しているため、自らの興味や関心のみを追求して対人関係の誤解や問題を引き起こしたり (Jacobsen, 2005; Jordan & Powell, 1995; Hobson, 1993)、様々な情報を集約し包括的に理解する能力に欠けているため、既習事項の記憶の再生、作文や長文の読解などに支障をきたしたりするなど (Jacobsen, 2005)、学校生活や社会生活において深刻な不適応を招きやすい重要な問題的特徴が指摘されている (Attwood, 1998; 杉山, 2002; 上野・市川, 2010)。

近年、上記のようなアスペルガー症候群の問題的特徴に関して、とりわけ、共感性の欠如に関する認知的な要因に着目し、独自の理論的枠組を講じて、問題の原因や支援のあり方などを明らかにしようとする様々な研究が発表されるようになってきた。

通常、各理論の検討や比較がなされる際には、短期の実験環境で示されたデータ資料などを基に、その成否が論じられることが多い。しかし、上記のような認知的な障害に対する支援

法の開発という目的を考えると、中長期に渡る支援の事例などの結果を用いて、各々の理論が、この障害の形成のプロセスや要因の理解や支援のあり方に示唆を与える知見が提供されているかという観点から、理論の成否を検討することも必要だと考えられる。そこで、本論文では、アスペルガー症候群の児童生徒に対する支援という目的に沿って、アスペルガー症候群の共感性の欠如に関する認知的な問題形成のプロセスや要因を説明し、支援のあり方に対する示唆的内容などを示す包括的な理論を取り上げ、筆者が担当した約一年半にわたるアスペルガー症候群の支援事例を基に、主な論点を整理した上で、その障害形成の理解と支援という観点から、その理論に対する考察を行うことを試みていきたい。

## 2. 共感性の欠如と不適応の関連性

さて、アスペルガー症候群の性質を概括すると、共感性の欠如、特定の関心事に対する固執や常同行動、対人関係技能や非言語的コミュニケーションの稚拙さ、一部の領域における認知学習上の問題などが指摘されている (Attwood, 1998; 杉山, 2002; 上野・市川, 2010)。

中でも、他者の感情や欲求、意図などを適切に推察し理解できないという、共感性の欠如は、自らの興味や欲求のみを追及する一方的な他者への関わり方などに通じるため、自己中心的な動機によるものであるとの誤解を生じやす

く、いじめなどの深刻な対人関係上の問題などに発展することも少なくない (Cumine et al., 1998; Jacobsen, 2005)。

このような対人関係に関する不適応は、総じてアスペルガー症候群に特有な他者の存在や言動に十分な注意がいかず、上記のような他者の心情という側面が適切に認識されないという認知的な問題傾向により生じるものであると述べられている (Jacobsen, 2005; Jordan & Powell, 1995; Hobson, 1993)。

### 3. 共感性の欠如とTOM (心の理論)

さて、アスペルガー症候群などの児童生徒が示す共感性の欠如に関しては、認知的な観点から、その特徴が論じられている。

多くの研究は、Theory of Mind (心の理論, 以下TOMと記す) と呼ばれる、いじめの加害行為など、共感性の欠如により生じると考えられる諸問題の形成の議論に引用されている理論的枠組みを用いて、実験的調査により、上記の問題に対する説明を試みている。

TOMは、他者の信念や欲求などを推測し、また、他者の信念や欲求に関する情報から、その人物の行動を予測することなど、他者の心情理解に関する認知能力である (Baron-Cohen, 1995)。TOMの研究では、他者の誤った信念課題という実験を行い、自閉症児が他者の心情の理解に困難を示すことを論じている。Baron-Cohen et al. (1985) のアンとサリーのテストという一次の誤信念課題の実験では、サリーがカゴにビー玉を入れた後に退出し、アンはサリーがいない間にビー玉を箱に移し変え、後にサリーが戻ってきた時に、サリーはどこを探すかを尋ねる課題での反応を検証している。これは、<「サリーはビー玉がカゴに入っていると思っている」とAさんは思っている>という形で、他者の信念という命題に対して、どのような態度や判断を示すかを問う、メタ表象の認知的能力を検証するものである。その結果、自閉

症児では、8割以上がサリーはアンがビー玉を移し変えたことを知らない状況であるにもかかわらず、アンが移し変えた箱を探すという反応を示している。特筆すべきは、この実験に参加した自閉症児は、障害のない児童と精神遅滞の両群より年長で精神年齢が高かったにもかかわらず、この他者の心情理解の課題成績が劣っていたことである (Baron-Cohen et al., 1985)。さらに、“<「サリーはビー玉がカゴに入っていると思っている」とAさんは思っている>とBさんは思っている”という、6歳から7歳の通常児童であれば理解できる二次の誤信念課題に対しても、自閉症者は、暦年齢が13歳以上で、精神年齢が8歳以上であったにもかかわらず、この課題が達成できなかったと指摘されている (Holroyd & Baron-Cohen, 1993)。また、スマーティーズテストと呼ばれる、スマーティーズというお菓子の箱に鉛筆が入っていることを被検児に明かした上で、このような事情を知らない他者が箱の中に何が入っていると思うか問う、他の誤信念課題でも、同様に、自閉症児は、他者の信念を推測し理解することが困難であることが明らかになった (Perner et al., 1989)。

また、Happé (1994) は、アスペルガー症候群のような知的能力の高い自閉症者を調査対象として、罪のない嘘や冗談、皮肉のような字義通りの意味を持たないコミュニケーション課題の実験 (strange stories) を行い、彼らが、人を傷つけないという情緒的な動機により他者が嘘をつくことを理解できず、カップを電話に見立てるような軽い冗談の動機を即物的な欲求などと取り違えるなど、表面上は表現されない隠された感情や意図、欲求などの理解が極めて難しいことを示している。ここでも、知的な能力の高いアスペルガー症候群などの自閉症者は、障害のない者だけでなく、知的な能力に著しい問題がある精神遅滞の者と比べても、他者の心情理解により大きな困難を示すことが論じられている。

さらに、Baron-Cohen et al. (1997) は、や

は、知的な遅れのないアスペルガー症候群や高機能自閉症などの成人を対象に、人の鼻から眉毛までの部分的な写真を提示して、その目の写真情報から複雑な感情などの心的状態を推察する新たな課題で検証を行っている。その結果、アスペルガー症候群などの知的能力の高い自閉症者は、目の写真から性別を適切に認識することや、顔全体の写真から、うれしい、悲しいなどの基本的で理解しやすい感情を読み取る課題では、障害のない者や音声や行動のチック症状を主体としたトゥレット症候群の者と同様の水準を示すが、目の周りの部分的な写真から自省的な心的状態や空想的な心的状態などのより複雑な感情を読み取る課題では、他の二群に比して、低い水準を示した。これにより、アスペルガー症候群の者は、微かな視覚の刺激情報から、他者の複雑な感情表現を推察理解することが難しいことが明らかになっている。

ここで、実生活を考えると、そこでは、上記の実験課題に比べて、より複雑な対人関係や高度な社会技能が求められる環境にさらされるため、アスペルガー症候群のような障害を抱える者は、他者の心情の理解に大きな困難を抱えて、多様な場面で不適応状態に陥ることが多くなると考えられる（内山・水野・吉田, 2002）。

要約すると、前記の実験などにより、アスペルガー症候群などの自閉的な障害を抱える者は、他者の心情を推測し理解する能力に欠けているため、他者との相互的なコミュニケーションにおいて様々な困難が生じて、多様な対人関係の場面で不適応状態を示す危険性が高いと考えられる。また、彼らが、知的能力の著しい問題を示す精神遅滞者より、他者の心情理解に関する成績水準が低いことから、その原因は、IQなど知的要因ではなく、認知的なプロセスの障害により発生するものだと推察できる。

## 4. 共感性の欠如の形成過程に関する理論

### ① 他者の心情理解の包括的システム論

Baron-Cohen (1995) は、上記のTOM（心の理論）を補足、拡充する形で、4つの下位構成要因による他者の心情理解に関する包括的なシステム論を提唱している。そのシステムは、人間が進化の過程で獲得される生得的な機能として、ID（Intentionality Detector）という意図の検出器、EDD（Eye Direction Detector）という視線の検出器、SAM（Shared-Attention Mechanism）という注意共有の仕組み、TOM（Theory of Mind Mechanism）という心の理論の仕組みの4つの下位構成要因を想定している。

まず、ID（意図の検出器）は、視覚、触覚、聴覚などの感覚器官から入力された情報を解釈して、他者の意図を読み取るものである。EDD（視線の検出器）は、他者の眼の存在を検出し、視線を特定し、その視線が向けられている対象を認識して、他者の関心や注意が何に向けられているか解釈するものである。

上記のIDやEDDは行為者が、特定の対象や自分などに向けた意図や関心、注意に関わる認識を表すためのものであり、たとえば、IDは、行為者が発する足音などを感知して、行為者が何のためにどこに向かっているかという意図を探り、他方、EDDは、行為者の視線の方向や対象を認識し、何の対象に関心や注意を向けているか認知的な分析を行うことになる。

さて、SAM（注意共有の仕組み）は、他者が注意を向けている対象と自分が注意を向けている対象を相互に観察して、両者が同一の共通した対象に注意を向けていることを認識することに関連した能力である。これは、自他が視線を向けている対象が同一であることを認識することにより、行為者と自分と対象の三者間において、関心や意図の共有関係が形成されることを意味しており、他者と自分が共通の経験を持つことにより対人関係の基盤を構築することに

つながる。また、このSAM(注意共有の仕組み)には、IDやEDDで検出された情報が用いられるが、行為者の意図や関心などが曖昧な状況では、幼児が行為者の目を見ることによって意図や関心などを再確認しようとすることから、EDD(視線の検出器)によってもたらされる視覚情報がSAM(注意共有の仕組み)形成に対して極めて重要な影響をもつことが指摘されている。

さらに、TOMM(心の理論の仕組み)について述べると、SAMによって得られた他者と自分と対象の三者間の形成された意図や関心の共有関係という三項表象の情報は、他者の行為の意図や目的などを表した命題に対して、自らの態度などの心的な認識状態を示すメタ表象へと変化する(たとえば、「サリーちゃんはビー玉がカゴに入っていると思っている」という命題に対して、Aさんが、<思う>、<知る>、<想像する>、<推測する>、<ふりをする>などの態度を表すること)。そして、このようなメタ表象で得られた他者の行為の意図や目的などに関する知識を用いて一貫した理論を形成することで、一方で、他者の行為を予測し、他方で、他者が行った行為を説明することが可能になり、TOMMを活用してより複雑な対人関係の構築へと進んでいくのである。

## ② 自閉症と心情理解の包括的システム論

他者の心情理解の包括的システムと自閉症児が示す障害との関連性を見ていくと、Baron-Cohen(1995)は、自身が関わった研究などを精査して、自閉症児が上記の包括的システムの下位過程において、特有な性質や障害を示すと論じており、その概要を下記に示す。

まず、IDにおいては、自閉症児は、基本的には障害を示さないとしている。その根拠として、行為者の欲求や目的を認識できること、生物と無生物など行為者の分類ができること、欲したものが得られる際の喜びや得られなかったときの悲しみなど、欲求と基本的な情動の関連

を認識できることが挙げられている。

次に、EDDについては、Baron-Cohenの一連の研究結果から少なくとも、自閉症児の初期的で基本的なEDD機能は正常であると論じている。これは、写真の中の人物が見ている対象を指摘できること、他者の視線を適切に解釈できること、自閉症児が自発的会話で見るという言葉を用いること、誰が何を見ているか正しく認識できることなどから判断されている。

さて、SAMの中核的な意味は、他者と自分が同一の対象に対して興味や関心を共有し、他者に対して心の波長を合わせることにあるが、自閉症児は、このような機能に著しい困難を示す。それらは、他者の視線を適切に観察しないこと、自閉症児が他者との共有的な場面で、指差しジェスチャーを用いて、他者の視覚的注意を向けさせようとしめないこと(ただし、自分の欲するものを準備させるようなときには指差しジェスチャーを用いる)、また、他者との会話で相手が聞きやすいように声の音量やイントネーションの調節をしないことなどに象徴されている。このような傾向は視覚、聴覚、触覚のあらゆる側面に示されているとしている。

さらに、TOMMについても、アスペルガー症候群などの自閉的な障害を抱える子どもたちは、前記のように、一次の信念課題、二次の信念課題に対して、他者の信念を正確に認識することに困難を抱えているとしている。また、Happéのstrange storiesの実験で明らかになったように、自閉的な障害を持つ者は、字義通りの意味を持たないコミュニケーションにおいても、人を傷つけないための情緒的な理由による嘘や、軽い冗談などの文脈的な理解が出来ず、表面に現れていない隠された感情や意図、欲求などの推察や理解に著しい困難を示す。さらに、彼らが、他者の心情理解に関する理論を形成して、それを用いて他者の行動を予測したり、説明をしたりすることが極めて難しいことを論じている。このような認知的傾向は、総じて、アスペルガー症候群のような自閉症児が、

TOMMのような一貫した理論を形成して、他者の行為を予測したり、他者が行った行為を説明したりすることに著しい不適応をもたらすものと考えられる。

これらを要約すると、アスペルガー症候群などの自閉圏内の障害をもつ者は、他者の心情の理解が充分に行えず、他者との関係性が希薄な場面を除き、多様な対人的場面で不適応を示すが、これらは、SAMやTOMMなどの特定の認知的なプロセスにおける障害が原因となって発生していることを説明しているのである。

### ③ 対他関係と心情理解の発達理論

Hobson (1993) は、他者との対人的交流を通じて、認知的な発達が促進されるという観点から、他者の心情理解や、自他の比較による自己意識の確立などの形成過程を論じている。このような発達段階の概要を下記に記していく。

乳児は、大人が示す、幸せ、悲しみなどの表情に呼応して、同じよう表情を示す原始的の共有関係を脱して、本格的な他者との交流を行うようになる。そして、乳児は、対他関係を深めていく中で、自分と他者と外界（指示対象）との間に“三項関係”と呼ばれる初期的な共有関係を形成する。これは、子どもが、他者が関心を向けている同一の指示対象に注意を向けるという“共同注意”を用いた意識的な観察を行うことで、他者がその対象にどのような態度を示しているかを理解することにつながり、自らもその対象に対して何らかの態度を形成するようになる。一例を挙げると、乳児は、他者が、リンゴという指示対象を見ている状態を観察して、その指示対象であるリンゴに対してどのような態度を示しているかを理解し、子ども自身も、そのリンゴという同一の指示対象に対して、自らの態度を示すようになるのである。これは、“三項関係”という場によって、一方では、同一の事物を介した共有関係が形成されることを表し、他方では、他者の態度に接して、自らも、事物に対して、何らかの態度を示すようになる

ことを意味している。そして、子どもは、生後一年の終わりごろには、自分もつ者を見せたり、指を差したりすることで、他者の注意を引こうとして、自らの働きかけにより相互的な交流の行動を示すようになるのである。

さらに、上記の対人的な“三項関係”は、“意味の三角形”へと転化して、他者の理解が進み、自他の比較により他者と独立した存在としての自己意識が芽生えるようになる。そのプロセスは、“三項関係”が内面化していくに伴い、思考が、言語的なシンボル（例えば机という単語）を用いて、事物などの指示対象（特定の特徴を持つ家具）を表すという“意味の三角形”と呼ばれる三者関係に転じて、“シンボル表象”を用いた思考へと進化していく。これは、一方では、自他が、各々のシンボル表象を用いて、事物に対する独自の態度や判断などを表現するという立場の異同を理解することにつながり、他方では、一人が、ある事物に対して複数の異なる態度を取ることが可能となり、「～ごっこ」遊びや「～のふり」という形で他者の態度を取り入れることにつながっていくのである。

加えて、子どもは、他者の態度を自らに取り入れていくことで、他者の心情への理解を深めるとともに、他者と自らの態度や判断、感情などを照らし合わせる“社会的参照”と呼ばれる自他の比較を行なうことにより、自省的な意識が芽生え、ひいては、独立した存在としての自己意識が確立していくのである。いわば、対人関係をきっかけとして派生した、シンボル表象を用いた内面的思考の操作により、他者理解の深化と、“社会的参照”に促進された自己意識の確立という、適応的な対人関係の形成に不可欠な二つの発達課題を達成することになると論じられているのである。

これらの過程を要約すると、子どもは、原始的協応関係、“三項関係”、シンボル表象を用いた“意味の三角形”という形態のコミュニケーションなどで、対人的な交流の深化を重ねて、他者の心情理解、“社会的参照”という自他比



較による自己意識の発生へとつながっていくのだと説明されている。

#### ④ 自閉症と対他関係と心情理解の発達理論

Hobson (1993) は、自身や他の研究などを概括して、他者との関係性という観点から、自閉症者が、他者の心情理解や、自他の比較による自己意識の形成などに著しい不適応状態を示すようになるかという発達のプロセスの論考を展開しており、以下にその概要を記す。

この理論では、自閉症的障害を抱える者に、何らかの生得的な認知的欠損が存在していることを指摘した上で、その欠損が、対人関係の一定のプロセスに影響を及ぼし、対他関係の中で獲得される、他者の心情への理解や、自他の比較により形成される自己意識などの発達を阻害するため、様々な社会的不適応を生じるとしており、他者との関係において起こる認知的問題をより重視している。

まず、自閉的障害を持つ子どもは、他者とアイコンタクトを行うことが少なく、他者が関心や興味を向けている対象に対して、注意を向けることが出来ないことや、自らが物を見せたり、指差したりして他者の注意を引くこと出来ないため、相互的な対人関係の形成に大きな障害をもたらすと指摘している。これらの“共同注意”の欠如は、他者と自分が、同一の対象を介して成立させる共有関係の構築を困難にすることから、その関係的な枠組みの中で形成される、他者が対象に対して示す態度や関心を理解することや、それに関連し、自らがその対象に対して態度を示すことなどを妨げることにつながると論じられている。

前記のように、対人的な“三項関係”が、内面化して、シンボルを用いて指示対象を表象する言語的、思考的な三者関係へと転じていくに伴い、他者と自分が独立した存在として同一の事物に異なる態度などを持つことへの理解や、一人が事物に対して複数の異なる態度を示すことにつながる。

しかし、自閉症児は、前提となる対人的“三項関係”が十分に形成できず、次なる言語的、思考的な三者関係が形成できないため、彼らは、実際に、自分自身を彼と呼ぶような人称代名詞の遣い方に混乱を示すなど、自分と他者の存在の区別が充分できないことや、ティーカップを電話に見立てるなどの象徴的な遊びやごっこ遊びを苦手としているなど、事物に対して複数の異なる態度を示すことが困難であるという問題点を述べている。

既述のように、シンボル表象の問題により、アスペルガー症候群などの自閉症的な障害児は、内面的な思考を用いることで、その後、他者の態度や関心、感情などを自らに取り入れて、他者の心情理解を深めることに支障をきたし、自他の“社会的参照”による比較を行うことが困難となり、独立した存在としての自己意識の確立に大きな不適応を生じることになる。実際、彼らは、一方で、他者の信念の理解、字義通りではないコミュニケーションでの他者の心情理解、視覚情報による他者の複雑な感情の読み取りなどの様々な他者の心情理解に困難をきたし、他方で、鏡に映った自己像に充分な情緒的反応を示さず、自己の所有概念が明確に持てないなど、確固たる自己意識が確立できないと述べられている。

つまり、他者との対人的交流という観点から見えていくと、自閉的な障害を抱える者は、他者が関心や注意を向けている同一の対象に対して、注意を向ける、共同注意を用いた観察が行えないことにより、対人的な“三項関係”が形成されず、その後のシンボル表象を用いた言語的、思考的な三者関係へと転じる過程にも障害的影響が及び、他者の心情理解や“社会的参照”による自己意識の発達などが妨げられると説明されている。

## 5. 事例から見た認知的支援のあり方と課題

ここで、下記の筆者が担当した約一年半にわ

たる事例の研究（原，2014）を踏まえて、障害の形成プロセスや要因などを包括的に論じている Baron-Cohen と Hobson の検討や比較を行い、主な論点を整理した上で、それぞれの理論が、障害の形成のプロセスや要因の理解や、具体的な支援のあり方に示唆をもたらす具体的な知見を提供しているかという視点で、以下に考察を行っていく。

### ① アスペルガー症候群の男児への事例概要

この事例（原，2014）は、アスペルガー症候群の男児 A に対する認知関連の問題に対する支援に関するもので、以下にその概要を記す。

この事例の対象者 A は、支援開始時は小学校四年生であった。主訴は、学校生活への不適応と学習の遅れで、特に、他者との協調的活動が困難で、集団での清掃や班活動などがほとんどできずに、周囲の生徒の生徒の反発や非難を招いて、いじめなどに巻き込まれるようなこともあった。学習も、嫌いなことには取り組まず、とりわけ作文や長文の読解を苦手にしていて、積み木などの好きなことは何時間でも繰り返し続ける常同行動が見られた。

知能検査 WISC-R による全検査 IQ は 81 で、言語性 IQ と動作性 IQ には有意差はなく、下位検査により、全体と要素間などの情報の統合性や、空間の把握力が低く、目的に応じて情報と整理統合する認知能力に問題があると推察された。医師の診察によりアスペルガー症候群と診断され、A と母親両者の面接を行うことになった。以下、A の面接の概要を記す。

A は、挨拶や会話時に視線を合わせず、自分の興味や欲求を優先して、他者に構わず一方的な行動を示した。A に対する遊戯療法を行う中で、このように他者から自己中心的だとの誤解を招き、摩擦を生じる可能性が高い行動に対しては、指示命令は与えず、Th.（セラピスト：筆者）が感情を伝えるフィードバックを与えることにした（一例を挙げると、A が、Th. の番を抜かして一方的に遊んだ際には、「自分だけ

やっちゃうんだ、悲しいな」などの感情を伝えるフィードバックを与えた）。さらに、遊びの中では、Th. に過度に頼らないよう、A 自身が準備し、説明書を読んでルールを Th. に説明するように促した。また、これと平行して、自宅でも母親家族にも同様の取り組みを行ってもらい、学校でも可能な限り、このような取り組みへの協力をしてもらうことにした。

その結果、視線を合わせて挨拶することが習慣化して、母親の「悲しいな、置いてかないで」というフィードバックに呼応して、歩調を合わせられるようになった。また、長い間友だちに貸しっぱなしになっていたゲームを自ら行って取り返してきたという変化があった。

その後、A は他者に負けまいとする明確な対抗意識を持つようになり、ゲームで Th. や家族に対して競争的な態度を示すだけでなく、マラソン大会で女の子に勝つために、自分からランニング練習を始めた。このような強烈な対抗心は、時に Th. や家族に横柄な言葉や態度などにもつながったが、その都度、「そんなこといわれたら、悲しいな」というようなフィードバックを与えたことにより、謝罪の指示命令を一切してこなかったにもかかわらず、自ら「すみません」と謝罪をするなど、他者への配慮を見せられるようになった。

A は、その後、自分から忘れ物や物覚えの悪さを直したいという希望を Th. に伝えて、チェックリストを用いて忘れ物がないようにすること、また、既習事項が新たな学習によって阻害され再生できないという学習的な特徴に対して、既習事項と新規学習事項を関係付けて学ばせ、また、混乱しやすい類似点については、両者の違いを明確にして学ぶ取り組みを相談、家庭の双方の場で行うことになった。

結果的に、徐々に、忘れ物、記憶学習の問題は減少した。その後は、いじめられた際に、相手に NO と言えず、怒った表情などができずに、いじめを悪化させたことから、NO という言葉と表情で、自分の意志を相手に表明するトレー

ニングなどに取り組んだ。他にも、作文が自力で書けないことや衝動的行動の懸念により一人で外出できなかったという問題にも取り組み、自らの問題点の改善に自分から積極的に努力して、学習、生活上の困難を少しずつ改善していった。

## ② 支援的な観点からの理論への見解と考察

上記の事例を基礎に、アスペルガー症候群に対する支援という観点から、既述の他者の心情理解に関する包括的な理論として、TOMを補足拡充したBaron-Cohenの理論と他者と関わりを重視したHobsonの理論を取り上げ、それらに対して、一定の見解と考察を下記に述べる。

両理論とも、アスペルガー症候群を始めとした自閉的な障害を持つ者が示す共感性の欠如、他者心情の理解における困難などの認知的な問題形成の要因やそれによって生じる対人関係などの諸問題を包括的に論じた理論である。いずれも、生得的要因が、他者の心情への理解を困難にしていると主張している点では、一致している。しかし、Baron-Cohenは、進化論的に決定された発達上の問題としてより生得的な要因を強調するのに対して、Hobsonは、生得的な要因が、共感性などの他者の心情理解に不可欠な心的プロセスの発達に影響を及ぼして、困難状態を増幅させるとしている点で大きく異なっている。

上記事例を見ていくと、他者の感情に関するフィードバックにより、他者の感情理解を促進する支援法を基点として、後の様々な変容がもたらされている。このような著しい変容は、他者理解の困難を生得的な決定論に帰するBaron-Cohenの理論では可塑性の低さから変容の説明が難しく、感情のフィードバックにより、重要な鍵となる共同注意が喚起されたため、他者の心情理解が促進され、自己意識が明確化し、その後も、様々な不適応行動の変容がなされたらとHobsonの理論に沿って解釈するほうが

より適切だと考えられる。

また、他者の心情への注目の促進に呼応して、一方では、母親に対する協調的な歩行や自主的な謝罪が示され、他方では、自らの積極的な行動によるゲームの取り返しや、マラソンやゲームでの他者に負けまいとする対抗意識の高まりが示されたことが注目に値するといえよう。このような変化は、他者の態度の取り入れによる内面化した心的操作が、一方では、他者の感情理解の深化として、他方では、社会的参照に促進された自己意識の高まりとして、具現化したものと考えられ、Hobsonが説明する一連の発達の流れに沿った動きだといえよう。中でも、Hobsonは、所有意識の自覚や他者への競争心は、自己意識の高まりを象徴する動きだと論じており、その後、Aが自らの忘れ物の多さや物覚えの悪さなどの課題を直したいと希望したことも、社会的参照を用いて、自らを客観視することで自らに欠けている点を自覚し、それを補おうとする自己意識の高まりを示すものと考えられる。

他方、当初、Aは視線を合わせて挨拶や会話が出来なかったことに関して、他者感情のフィードバックを与えて、視線を合わせることに習慣化したのが、それに呼応するように、他者への協調的な行動が見られるようになった。これは、他者に視線を合わせることで、他者の態度、欲求、感情などの諸情報の獲得を促して、他者の心情理解につながったことを示唆している。Baron-Cohenの理論は、EDD（視線の検出器）が、ID（意図の検出器）、SAM（注意共有の仕組み）、TOMM（心の理論の仕組み）などの他の機能システムに強い影響を与えることを強調しており、適切な視線を向けることが、他者の心情理解に大きな役割を果たすことを具体的なメカニズムによって説明している点では、より有用な知見を与えていると考えられる。

上記の事例を基に、HobsonとBaron-Cohenの包括的な理論について論じてきたが、



本事例を見る限りにおいては、アスペルガー症候群に対する障害の形成プロセスと要因に対する理解と、その支援あり方を視点にすると、対人関係を重視したHobsonの理論が支援事例に対してより示唆的な知見を示すものであることが暗示された。しかし、Baron - Cohenの理論も、他者に視線を合わせて情報を得ることが他者の心情理解に不可欠であることをより具体的なメカニズムで説明している点では、きわめて重要な知識を提供しているといえよう。

既に述べたように、各理論の比較検討がなされる際には、短期の実験環境の中で得られたデータを基に、その理論の成否が論じられることが多いが、有効な支援法の開発という目標を考えると、中長期に及ぶ事例などの結果を用いて、それぞれの理論が、障害の形成プロセスや要因の理解や、具体的な支援に示唆を与える知見を提供しているかという視点から、理論の成否を考察することも必要となるのではないか。

## 6. 終わりに

本論文は、一年半にわたる事例の結果を用いて、障害の形成プロセスや要因の理解や具体的な支援を説明する包括的な理論を比較検討して、その障害の理解や支援に対する有用性を検討するという、一つの試みを行ったものである。しかし、この一事例を以って、その成否を判断するには限界がある。従って、このような視点に立った検討を今後も数多く行い、実験環境のデータの研究では捉えられない部分を補足して、考察を深めていくことが必要ではないか。

## 謝辞

本論文に記した筆者が担当した相談事例の発表に際して、Aさんと保護者の方のご快諾をいただきましたことに深く感謝を申し上げます。

## 【文献】

- Attwood, T. 1998 *Asperger's syndrome: A guide for parents and professionals*. London: Jessica Kingsley Publishers. (富田真紀・内山登紀夫・鈴木正子訳 1999 ガイドブック アスペルガー症候群—親と専門家のために 東京書籍)
- Baron - Cohen. 1995 *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press. (長野啓・長畑正道・今野義孝訳 1997 自閉症とマインドブラインドネス 青土社)
- Baron - Cohen, S., Leslie, A., and Frith, U. 1985 *Does the autistic children have a 'theory of mind'?* Cognition 21, 37-46.
- Cumine, V., Dunlop, J. and Stevenson, G. 1998 *Asperger syndrome: A practical guide for teachers*. London: David Fulton Publishers. (齊藤万比古監訳 2005 教師のためのアスペルガー症候群ハンドブック 中央法規出版)
- Jacobsen, P. 2005 *Understanding how Asperger children and adolescents think and learn: Creating manageable environments for AS students*. London: Jessica Kingsley Publishers.
- Jordan, R. and Powell, S. 1995 *Understanding and teaching children with autism*. Chichester: John Willey and Sons, Ltd.
- Happé, F.G.E. 1994 *An advanced test of mind: Understanding of story character's thoughts and feelings by able autistic, mentally handicapped, and normal children and adults*. Journal of Autism and Development Disorders 24, 129-154.
- 原英樹 2014 アスペルガー症候群の男児への認知関連上の問題に焦点を当てた援助 カウンセリング研究 47, 170 - 178.

Hobson, R.P. 1993 *Autism and the developing of mind*. Hove: Lawrence Erlbaum Associates Ltd. (木下孝司・玉村公二郎・別府哲・山口学人訳 2000 自閉症と心の発達—「心の理論」を超えて— 学苑社)

Holroyd, S., and Baron-Cohen, S. 1993 *Brief report: How far can people with autism go in development a theory of mind?* Journal of Autism and Development Disorders 23, 379-385.

Perner, J., Frith, U., Leslie, A., and Leekman, S. 1989 *Exploration of the autistic child's theory of mind: Knowledge, belief, and communication*. Child Development 60, 689-700.

杉山登志郎 2002 アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート—よりよいソーシャルスキルが身につく— 学習研究社

内山登紀夫・水野薫・吉田友子 2002 高機能自閉症・アスペルガー症候群入門—正しい理解と対応のために—

上野一彦 2003 LD (学習障害) と ADHD (注意欠陥多動性障害) 講談社

上野一彦・市川宏伸 2010 図解よくわかる大人のアスペルガー症候群 ナツメ社